

# 中国貨幣の歴史

## 23 宋代の貨幣①—宋の銭貨統一—



そうつうげんぼう  
宋通元寶



たいへいつうほう  
太平通寶



(真書体)

じゅんかげんぼう  
淳化元寶



(行書体)



(草書体)

しどうげんぼう  
至道元寶



(行書体)



(二文銭〈折二銭〉)

きねいじゅうほう  
熙寧重寶

五代十国の分裂時代の後、中国を再統一した宋は、中央集権的な皇帝専制体制を整えるとともに、諸国が独自に発行し地域的通貨になっていた銭貨の統一にも乗り出す。宋政府は、私鑄銭の取締り、銅原料の確保・管理を厳格に実施し、大きさ、重量など同一規格で全国画一の銭貨を鑄造・発行する。宋代は、中国史上でも銭貨鑄造の最盛期といわれ、旺盛な銭貨需要に応え、農産物や商品の市場的流通の全国的な拡大を支えていく。

(写真は実物 × 100%)

五代十国の分裂時代のなか、華北の五代最後の王朝「後周」(951～960年)で統一の機運が生まれ、後周の武将であった趙匡胤(太祖)が帝位につき「宋」(960～1279年)を建国し、都を開封(河南省)に定める。太祖は周辺諸国の征服に乗り出し、次の太宗の時代には、契丹族の「遼」(907～1125年)が支配する北方の燕雲十六州(現在の北京・大同を中心とする古くからの漢民族の定住地帯)とチベット系タングート族の「西夏」(1038～1227年)が領有した西北部(甘粛省)を除き、中国を再統一する(979年)。

宋は、統一を進めるとともに、中央集権的な皇帝専制体制を整え、王朝の権力基盤を回復していく。五代十国時代に各地で強大な権力を握っていた節度使を廃し、その政治的、軍事的権限を奪取し、中央・地方の行政機構を改革してあらゆる権限を皇帝に集中させた。財政面では、唐代後期以来の商品経済の発展を踏まえ、塩・茶・酒の専売税や商税の強化により財政基盤を整備し、商人階層を統制した。宋では、文人官僚を重用し、太祖のときに皇帝自らが科挙の最終試験を行う殿試の制を整え、文官が皇帝独裁を支える役割を果たす。

宋代の経済は、長江下流域での稲作生産の高まりを契機として江南地域が中国经济の中心となるが、農業では、江南を中心とする米のほか、華北の麦、湖南の茶など農産物の地方特産化や商品作物の栽培も進展する。また、各地で絹織物、製茶、製紙、景德鎮などの陶磁器といった手工業も発達する。こうした農産物や商品は全国的に取引され、その市場的流通の拡大とともに貨幣需要も加速していった。

貨幣については、五代十国時代には華北王朝、南方諸国が各々独自に発行した銭貨が地域的通貨となっており、私鑄銭(軽小な悪銭)も横行していた。旺盛な貨幣需要に応え全国的な物資流通を確保して経済的統一を図るうえでは、流通貨幣の中心であった銅銭を統一し、鑄造・発行量を拡大する必要があった。このため、宋は建国当初より、私鑄銭を回収し厳しく取り締まる一方、銅銭の銷溶、銅・銅器の製造・売買の禁止(銅禁)、銅銭の国外持ち出し禁止(銭禁)により銅原料を確保し、銅銭を鑄造していく。太祖(在位960～976年)は即位後、唐の「開元通宝」と重量、大きさが同じ一文銭「宋通元宝」を鑄造した。次の太宗(在位976～997年)は、改元ごとに銭名に年号を記した「太平通宝」、「淳化元宝」、「至道元宝」を順次鑄造し、以後も新たな年号を記した銭貨(年号銭)が鑄造されるようになっていく。

宋代の銭貨は、建国当初より大きさや重量などほぼ同一の規格が踏襲されるが、その主な特徴として一般に次の点が挙げられる。まず、宋代は、鑄造技術が高度に発達し、中国史上で銭貨鑄造の最盛期とされる。宋の銭貨鑄造は、唐をはるかにしのぎ、清朝に並ぶ鑄造量とされる。次に、銭名の多様性である。銭名が年号ごとに変わるほか、同じ銭名であっても真書・行書など複数の書体で記した銭貨(対銭ないし符合銭と呼ばれる)が鑄造され、これは中国の書道芸術を銭に応用したものとされる。このほか、一文銭以上の銭貨(大銭)として、二文銭(折二銭)が市場で受容されるようになったことも宋代の特徴である。宋の銭貨の基本は小平銭と呼ばれる一文銭であるが、二文銭は主要な銭貨の形式として宋代以降も引き継がれていく。

[山岡直人、日本銀行金融研究所貨幣博物館]

#### [参考文献]

- 日野開三郎、『日野開三郎 東洋史学論集 第20巻 東洋史学研究』、三一書房、1995年  
———、『日野開三郎 東洋史学論集 第6、7巻 宋代の貨幣と金融(上)(下)』、三一書房、1983年  
宮崎市定、『宮崎市定全集 第9巻 五代宋初の通貨問題』、岩波書店、1992年  
宮澤知之、『中国銅銭の世界—銭貨から経済史へ—』、思文閣出版、2007年  
———、『宋代中国の国家と経済』、創文社、1998年